

レポーター：学芸員の吉田さんです。よろしくお願いします。

学芸員：よろしくお願いいたします。

レポーター：こちらの作品はどういった作品なんですか。

学芸員：三岸好太郎という作家の描いた海と射光。射というのは射る、弓で射るとかの射るに光という作品なんですけど、一度見たらこう忘れられないこの、強烈な風景が描かれていると思うんですけれど。

レポーター：そうですね。

学芸員：海と射光というんですが、海というのは実際、そこに三角形の細長い部分ですね、そこだけなんです。で上にこう少し近寄ってみるとわかるんですけど、少し白いタッチがあって雲なのかなとわかるような水色の空があって、画面のほとんどその半分以上がですね、裸婦と様々な貝殻が落ちているこの砂浜になりますね。砂浜だろうなということはこの貝殻があることでわかると思うんですけど、なんともねっとりとしたこの桃色の不思議な画面になっている。

レポーター：そうですね、女性の体と、あまりこう、色の比較がないというか。

学芸員：そうですね。

レポーター：砂浜って貝殻がなかったらぜったいわからないような。

学芸員：そうなんです。けっこう、とてもその、この作品の胆というか、ほんとに単純化されていて砂粒が描いてあるわけでもないですし、貝殻がなかったら浜辺ってわからないような簡潔な構成ですね、一つの大きな特徴ですね。

レポーター：この方の作品はこういった作品が多いんですか。

学芸員：このころ、蝶と貝殻といってそのシリーズでその貝殻を海辺に配置したような作品をたくさん描くんですけど、直前まではすごくいろんな試みをしていて、このときは昭和初期なんですけど、大正時代最先端の技術がですね、ほとんど西洋で、そのころ中心だったのはパリですね。留学していた人とかが体験して帰ってきて紹介するってことがされてたんですけど、そういう実験的な試みも、その彼が相当積極的に行った、日本にいて彼自身が留学したことって一度もないんですけど、そういう人の一人だったんですね。この作品を描いたのが 1934 年なんですけど、この年に 31 歳の若さで実は亡くなってしまいうんですよ。これは彼の生涯を代表する作品でもあるし、最晩年の作品ということになってしまったんですね。

レポーター：そうなんです。いろいろ試行錯誤した結果、こういうシンプルな表現にたどり着いたというような。

学芸員：そうですね。まさにその通りで、その作品の前にいろんな試行錯誤する、その前の段階でも具象的な作品を描いているんですけど、このなんていったらいいんでしょうね、裸婦もその顔を布で覆い隠していて、シュルレアリスムとかの影響が

すごく強い作品ではあるんですけど、純粹に視覚に訴えるような強靱なフォルムをもっていて、簡単なんだけれどもとても謎めいているというこのイメージを作りだした。やはりその様々な芸術運動というのを彼なりに咀嚼して、それゆえにたどり着いた境地なんですね。

レポーター：そういう晩年の作品って聞くと一番最初に見た印象と、聞いてから感じる印象とがまったく変わってきて、

学芸員：ああ、そうですか。

レポーター：その感慨深いものがありますね。

学芸員：そうですね。晩年っていっても 31 歳なのでですね。

レポーター：若くして亡くなってらっしゃいますし。

学芸員：ほんとにとっても劇的な作品にこう、なったわけなんですけど。

レポーター：こういった福岡市美術館ではこういうあらゆる年代の作品をご紹介しますか。

学芸員：そうですね。近現代美術のこの部屋では明治時代から、もうまさに 2000 年代までの作品をあつかっています。福岡のゆかりの作品からこのように日本の近代美術を代表するような作品、あと世界の 20 世紀以降の美術の重要な動向にかかわる作品というものを随時展示しております。